

# 命がけで天然痘に

てんねんとう

# 立ち向かった

かさらはくおう

# 笠原白翁



笠原白翁肖像（福井市立郷土歴史博物館蔵）

**笠** 原白翁は、文化6（1809）年、町医者の子として足羽郡深見村（現在の福井市）で生まれました。28歳の時、加賀の大武了玄と出会い西洋医学の素晴らしさを知り、32歳の時に蘭方医の第一人者であった日野鼎哉のもとで学びました。

弘化2（1845）年、30万人（当時の人口の1%）もの死者を出していた伝染病、天然痘について牛痘種法という予防法があることを知ります。翌年、白翁は、痘苗（ワクチン）を輸入しようと福井藩主、松平春嶽

に請願書を提出します。

請願書には、飢饉、戦争、疫病は国家の三大厄難。その中でも、疫病は最も人命を奪い、国力を弱める」とし、国家の視点に立ち、その必要性を論じました。白翁は、経費をすべて自分で負担するとまで記載し、その熱意を表します。しかし、請願書は役人の手元に留められ、春嶽の手元に届きませんでした。一介の町医者が藩主に対し、請願書を出すなど異例中の異例と考えられたのでしょう。

嘉永元（1848）年、白翁は2回目の請願書を提出。今回は請願書

が春嶽の手元に到達し、事業の有益性が認められます。

その後には、侍医で白翁の同志の半井仲庵の働きかけがあったともいわれています。また、春嶽の先見性がなければ認められなかったでしょう。春嶽は過去に全治1年以上となる疱瘡にかかったことがあり、病の恐ろしさを知っていたこともあり、道中ですでに痘苗が京都に到着していることを知ります。そして、京都、大坂の除痘館開設に尽力した後、福井へ旅立ちます。

嘉永2（1849）年には、長崎に痘苗が到着。白翁は、長崎に向かう道中ですでに痘苗が京都に到着していることを知ります。そして、京都、大坂の除痘館開設に尽力した後、福井へ旅立ちます。

痘苗は成分を維持し続けるためには人から人へ植え継いでいく必要があります。白翁は痘苗を福井に持ち帰るため、種痘をした子供たちを連れ京都を出ます。道中の栃ノ木峠には2メートル近く雪が降り積もり、何度も遭難の危機に遭いながら、まさに命がけで痘苗を福井に届けたのです。

嘉永2（1849）年12月、仮除痘所を福井に開設。その2年後、公

立の種痘所が開設されました。福井藩の種痘所は他諸藩よりかなり早く、これは医学における先進性を物語っています。種痘を公営事業とすることに尽力した白翁の熱意と、それを理解・許容した春嶽の二人が成し遂げた偉業だったのです。

翁の「白」はオランダ語のハクシン（ワクチン）の「ハク」だと言われています。種痘の普及に命をかけた男に相応しい名前といえるのではないのでしょうか。

## 関連史料・ゆかりの地

### 種痘所「除痘館」跡地



福井に痘苗を持ち帰った笠原白翁は苗を断絶させないために、隣家に除痘館を設け種痘を開始しました。白翁の藩への働きかけもあり嘉永4（1851）年に公営の除痘館が開設されました。

【住所】福井市春山1丁目（JR福井駅より徒歩約15分）

参考資料等

三上一夫・舟澤茂樹編『松平春嶽のすべて』新人物往来社  
青少年育成福井県民会議編『若越山脈』第3集